

# 大塚 大（おおつか・ひろし）

## 1、プロフィール

歌人。県立八戸高校に入学。

<生没>

1951(昭和 26)年2月8日～1975(昭和 50)年 12 月 30 日

<代表作>

『野分の音す』

<青森との関わり>

八戸市生まれ。昭和 42 年に八戸の国原短歌会に入会。翌年コスモス短歌会に入会し作品を発表する。

## 2、作家解説

昭和 41 年に県立八戸高校に入学し、同校の歌人で、田向竹夫教諭の指導の下に作歌を始める。昭和 42 年八戸の国原短歌会に入会。翌年準国原賞を受賞する。その年中央のコスモス短歌会に入会。盲腸炎のため大学受験を断念し、翌年二松学舎大学に入学、川崎市のアパートに住む。

作歌してまもない大塚は、早くからその才能を発揮し、角川短歌賞の次席となるとともに、在京の若いコスモス会員に呼びかけ、勉強会を始め短歌に打ち込む。コスモス短歌会の桐の花賞、〇先生賞を受賞する。

大学卒業後、コスモス短歌会事務室に勤務するも、その年の 10 月に退職、帰郷し、デーリー東北新聞社に就職する。昭和 50 年 12 月 30 日午前零時 30 分、帰宅途中の国道 45 号線を横断中に、自動車にはねられ即死、享年 24 歳。

翌年友人たちの力により、遺歌集『野分の音す』を角川書店から発行される。

大塚大の歌は、対象の切り取り方、語句の斡旋が実に的確で隙もない調べをなしている。10 代半ばから 20 代半ばの 10 年足らずの間に詠んだ歌は、みな驚くほどの完成度をなしているだけに、夭逝はあまりにも惜まれる。

宮柗二は『野分の音す』の序文に、「くらく土の匂ひす、敢へて見て居る街囀む霧、踏み惜しみ居る老人1人、畑を恋ひつつ飯たくわれは、といった四五句には、短歌の表現様式がひびかする心の集約がある。が、また彼の生れを語るような、東北人の後追いの言いかたをしのばせる。(中略)大塚君は二十四歳で、昭和五十年十二月三十日に東北の国道四十五号線で、不慮の事故で逝った。(中略)私はひどく悲しい」と記している。

### 3、資料紹介

#### ○『野分の音す』

図書

1976(昭和51)年11月23日発行

195 mm × 155 mm

大塚大天逝の翌年に、友人たちの力により発行された遺歌集。「コスモス」や他の発表歌誌、未発表の作から年代順に、509首を収録。駒井哲郎氏、若山八十氏のエッチングをカバーと口絵に。宮柗二の「序文」、巻末に諸家による解説、略年譜、あとがきを掲載している。